

「一人の若者」

2014年11月27日

マルコによる福音書 14章 51節～52節。 一人の若者が、素肌に亜麻布をまといてイエスについて来ていた。人々が捕らえようとする、亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった。

主イエスはエルサレム神殿の衛士に捕縛された。弟子たちは皆、オリーブ山から逃げ去った。亜麻布を着た若者が逃げ遅れた。衛士は彼を主イエスの仲間と見て、捕えようとしたが、掴まえられた亜麻布を脱ぎ捨てて逃げた。マルコ福音書は、逃亡した若者の姿を簡潔だが、リアルに伝えている。彼は誰であろうか。私は「過越の食事」のために「二階の広間」を提供した母親の息子ではないかと推測する。母親は主イエスを愛し、尊敬していた。神殿当局から命を狙われているのに、惜しまずに協力をする。息子は主イエスに興味を持った。彼は「過越の食事」、オリーブ山の道で弟子たちのつまずきの予告、そして、弟子たちは眠りこけていたが、主イエスの苦悩の「ゲツセマネの祈り」を見聞きしていた。母親の尊敬する主イエスに対し、若者らしい感覚で、全てを見届け、心を惹かれていた。その彼が逃げ遅れ、捕まりそうになったのではないか。

イスカリオテのユダが自死した後、後継者選びがなされたが、そこは「泊まっていた家の上の部屋」と書かれている。「過越の食事」をした「二階の広間」ではないか。

更に、使徒言行録 12章には、興味深いことが記されている。誕生したエルサレム教会は強い愛で結ばれた共同生活をする群れとなり、人々から信頼され、教会は日々、成長していた。ところが、イスラエル人の規範である律法と誇りである神殿を、彼らが軽視することが分かり、迫害を受けるようになった。領主ヘロデはヤコブを剣で殺害した。民衆が喜んだので、さらにペトロを捕え、投獄し鎖でつなぎ厳重に監視させた。「教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられていた」。獄中に天使が現われ、牢の中を照らした。ペトロは天使に導かれ、門の外まで出ることができた。エルサレム教会を愛する人の手引きで脱獄できたのであろう。門番は監視怠慢で、死刑になっている。外に出たペトロは「マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った」。ここも「過越の食事」をした「二階の広間」ではないか。すると、母親はマリア、息子はヨハネとなる。亜麻布を脱ぎ捨てて逃げた若者は、このヨハネではないか。

ヨハネはクリスチャンになり、異邦人教会のアンテオキア教会に加わっている。バルナバとパウロはアンテオキア教会から送り出され、第一宣教旅行に出発した。この時、ヨハネが助手として同行している。ところが、彼は宣教旅行の途中、ベルゲで、バルナバとパウロから別れて、エルサレムに帰ってしまった。なぜ、宣教旅行をやめて、エルサレムに帰ったのであろうか。

パウロとバルナバは第二宣教旅行を企てる。その時、バルナバは「マルコと呼ばれるヨハネもつれて行きたい」と言ったが、パウロは「自分たちから離れ、宣教と一緒に行かなかったような者は、連れて行くべきではない」と主張し、意見が激しく衝突し、パウロとバルナバは別々の宣教に向かった。

マルコ・ヨハネは宣教生活の厳しさについて行けなかったのか。彼はマザコンで、母が恋しくエルサレム（実家）に帰ったのか。私は後者ではないかと思う。

聖書は必要なことだけを記しているので、読者に諸々の想像をかき立たせる。私は、亜麻布を脱ぎ捨てて逃げた若者をマリアの息子ヨハネだと想像している。主イエスの深刻な「ゲツセマネの祈り」を伝承した彼の功績は大きい。